



中里恒子全集

第九卷

中里恒子全集 第九卷

定価二三〇〇円

昭和五十五年九月十五日印刷

昭和五十五年九月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

銀座の焼芋

3

小さな家の小さなあかり

27

名曲

61

サンキュウ・レター

87

金魚

115

燕子花

135

虹のなかの女

165

てんでんばらばら

199

遊蝶花

231

赤い花をもった女の子

呂宋の茶碗

乾いた芝生

霧

あぶら蟬

波の上の人形

あとがき

解題

425 423 405 379 349 319 293 267

銀座の焼芋

「……なんか、ちょっと食べるものはないかね……」

會社の仕事は、一切家庭へもちこまないことにしているのだが、役員會で審議する新企画についての資料を、経理担当の面から、一應も二應ものみこんでおかねばならないので、北見は、もち帰った書類を、二晩つづけてしらべていた。

それも片づいて、二階から下りて来た。まだ九時すぎたばかりである。

「そうですね、ございますものは……もなか、カステラ、ファンシイ・チョコレートっていうのもありますけれど……」

細君のてる子が、ぺらぺらと並べたてた。

「もなか、カステラ……あんまりぞっとしないね……」

「ぞっとするものって、どんなものですか、」

てる子は、形容だけでは信用しなかった。そう言われると、北見も、返答に困って、
「こてこてしないような……腹にもたまらない、パリっとしたものだよ、」

「……そうね、そんならこの間、田所さんが送って下さった、カルルス煎餅はいかが……」

ばたばたと立ちあがって、丸罐を持ち出し、カワラケのようなお煎餅をそっととり出して、丁重に、京塗の盆ザルに並べた。

北見は、こんなものじゃあないんだ、と言おうとしてやめた。仕方なく、一枚とって食べた。腹にはたまらないが、うまいなどという代物ではない。

てる子も、一枚おつきあいに食べ乍ら、

「……ほんとに、うまいんですか、これ……あたし、わるいんですけれど、やっぱり、もなかの方がいいわ、」

てる子は、もなかを持って来て、食べなおし出した。北見は、時折、つきあいで銀座あたりのバアへゆくが、この間、バアで食べた焼芋が、ばかにうまかったのである。

「……ごてごてしないという意味は、まあ、お茶漬とか、焼芋みたいな、そんな、ずばりとしたものさ!」

「あら、焼芋ですか、そんなものがよろしいんですか……」

てる子は呆れた顔つきで、

「あなたも、時々妙なものを思い出しになるのね、焼芋なんて、何年にも、あたし、食べたことありませんわ、戦争中、いやになるほど食べましたから……見るのもうんざり……」

痩せぎすで、ペリカンのように口の大きなてる子は、見るからに、優しいほそい眼をして笑った。

「……違ふよ……戦争中の芋とは……そんな、世帯じみた焼芋じゃあないんだ、」

「あら、そんな、焼芋、どこにあるんです、」

北見は、てる子の道徳観に、てこずった覚えがある。――先輩の酒井家で、或るトラブルが起ったときのことだ。

酒井夫人というのは、誰でも、口を揃えてみとめる美女であり、良人の酒井は、かちかちの、味もそっ気もない、ひからびたような人物にみえるのに、あにはからんや……酒井には、二号夫人なるものがあって、しかも、そこに、子供がふたりあって、ひとりはずでに、中学生であるという事実が暴露したのである。

北見てる子と、酒井夫人とは、日頃、肝胆相照らす仲だったので、忽ち、このさわぎが、てる子の耳にはいった。

「……なんてまあ、はれんちなことでしょう……バアの女のひとですって……永い間、よくも、こそこそと……」

「だって、堂堂とやれることではなからう……人間の情というものは、なにも美しいだけ、利口なだけではないからね、」

「いいえ、わるい女ですわ、女の敵です、」

——ここでは、酒井家のトラブルは、本筋ではないので、あとは、どうなったかかまわぬとしても――北見は、そのときの、てる子の昂奮から推して、バアと言えば、悪の巢窟のように思っているらしいので、ちょっと、バアへ出入りしていることを、あきらかにするのを、はばかった。

しかし、一面また、順調にかく育って、わき眼もふらずに、うなぎのぼりに出世した、ミスのない父親を、男のシンボルのように、いまだに思いこんでいる始末のわるさに、へきえきしていた北見は、ちょっと、男の秘密のようなものを誇示したい気もあって、

「……焼芋なんて、バカにするけれど、遊び場所で、わあわあ言って食べるのは、うまいもんだよ……」

「遊び場所って……」

若いときから、てる子の、根掘り、葉掘り癖はなおらない。

「……お茶屋だとか、バアとか、あるでしょういくらでも、」

「まあ、そんなところで、焼芋なんて……けちですわね……」

北見は、こんな、おもしろくもない細君と顔をつきあわせて二十年も、浮気をしないでいたのが不思議だと思った。いい機会だから、少し、細君の、石あたまを叩いてみよう、と、

「なににも、食うに困って、餓えをしのぐために食べる芋じゃあないんだ……どうせ、遊び場所へ来る常連は、うまいものなんか、一應知りつくしてるよ……女だって、そうですよ、……もなかも飽きた、シュークリームも飽きた、ああ、お芋がうまいわ……ということなんだな……」

「あら、そうですか……じゃあ、あたしも、いっぺん、銀座の焼芋たべてみたいわ、たべに、連れてって下さいよ、」

「たべにって、バアだよ、あんたのきらいな、悪徳の温床のような……」

北見は、わざと、わるく言った。

「じゃ、お土産に、買ってきて下さいませ……ダイヤモンドを買ってくれというわけではないんですから……」

てる子にしては、いい文句であった。

「……土産に買って来るなんて……そんな、あんた……」

「ですから、食べに連れてって下さればいいでしょう、女がいつては、いけないんですか、」

こうなつては、ことがまづくなる一方である。北見は、さからわずに、

「そのうち、連れてゆこう……酒井さんは、仲なか通人だからね、酒井さんのお伴をしようそのうち——」

そのうち……という夜がやって来た。

重役のひとりの、還暦の祝いがあって、北見や酒井も出席した。その日は、細君同伴で、公然と料亭に集った。

宴会で顔なじみの、清元のうまい妓が来た。北見は、その女の、さっぱりした気性が気に入っていた。

「……還暦でいらっしゃるんですって……お珍しいわ、みなさん、お年をおっしゃるの禁物なんですよ……ねえ、年なんか、どうでもいいじゃありませんか、年ではありませんわよ、生命力よ男は……」

「その生命力で、道行きをやるって……今夜は、」

「……さようですか、道行きのお伴を仰せつかるとは……うれしいこと……」

「よろしい、どうせ、還暦となつては、やぶれかぶれだ、たがいに手を取りあって、ゆくよりほかはないからね……落人をやろう……」

北見は、ちらっと、細君の方をみたが、

「折角、おめでたの席で、落人とは、えんぎがわるいわ、」

と、酒井夫人とささやきあっているのだった。細君は、落人というものの自体が、なんだかわからない。わからない顔でうなずいているだけである。北見は、てる子のそういう野暮ったさが、この、もの馴れた、たち居の柔かい女たちの雰囲気のなかで、のびのびと、いかにも、ぽかんと見えるのを、却って気持よく見ていた。

やがて、席がしつらえられて、主賓と妓が、落人を語り出した。

すすき尾花はなけれども……

世をしのびのたびごろも

きつつなれにしふりそでも……

「あら……これ、お軽勘平のことですか、」

細君のてる子は、遠慮のない声で、新発見のように、北見に言った。

「うん……」

かくせど色香、梅のはな、ちりてもあとの花のなか……

男の枯れた声と、裂くような、ほそい女の声と、からみあって響いた。うたの情緒のなかに、北見は、男女の心の結びつきから、からだの結びつきが、生なましく匂うのを、黙ってきいていた。――

「……あたしも、なにか習おうかしら、」

帰り道で、ポツンとてる子が言い出した。

「ああ、なんでもお習いなさい、」

「だって、あんな風に、おふたりで気をあわせてうたってらして……まるで、道行きしそうで、あぶないわね……奥さん……」

「なんでも、そういう風にとるのは、とりすぎですよ、いいじゃあないか、好きな女がどこかにひとりぐらいいてさ……たまには、手を取りあったって……」

「……今更、手を取りあっても、落ちゆく先もありゃあしないよ、」

北見と酒井は、笑いあった。

「そうそう、どうでしょう、バア・キリキリへ一寸寄りましょうか……」

久しぶりに晴天の土曜日で、銀座は、若い男女が溢れていた。

バアの入口に、石焼芋の屋台が出ていた。北見は、ぱっと、屋台から焼芋を買った。くらい、はなやいだ夜のテールについて、口ぐちに挨拶を受けながら、

「どうだい……お芋……」

無造作に、銀盆の上へ、ころころと轉がした。にこにこ女たちが寄って、

「わあ、いい匂い……」

「あたしも頂くわ、」

酒井夫人も、手を出した。てる子も、丸まるしたのをつまんだ。みを割ると、ほかほか匂うあたたかさ——べつに、おながが空いているわけではないのだが、妙に、焼芋がうまいのである。てる子は、レモン水を飲みながら、悠悠と焼芋をたべていた。

「ほんと、うまいわ……焼芋は、銀座に限るわ……」

「そうですよ、目黒のさんまみたいなものですよ……」

北見は、黙って、美しくない細君の姿をみつめていた。食べ終るとてる子は、
「いつでしたか、たくが焼芋が食べたいう言うんですの、どこで召し上ったんですかときいたら、銀座のバアだって——ですからあたし、今日は、焼芋をたべにきたのよ、」

ぺらぺらと、マダムに喋っている。

「まあ……ときどき奥さまも、焼芋をたべにいらして下さいませ……」

「そうね、いいんですか、伺っても……どうやって、男のひとと仲よしになるんだか、おもしろいわね、見てるの……」

妻のてる子は、臆面なく言った。北見は、

「あんた……妙なこと言ってる、」

「あら、ほんとですわよ……たねも、しかけもないところ、見て頂きたいわ……」
マダムには、却って、こういう野暮天の、正直な奥さんの方が扱いいいのである。

黙黙と、お芋をたべ終った酒井の奥さんは、

「バアへ、焼芋をたべに来るといふのは、洒落てるわね……」

「そうなんですって……」

それから、女ふたりは小さい声になって、

「若いひとじゃ出来ない藝ですって、……そうかしら……あたし、いまの若いひとなら、気取りも見栄もなく、焼芋買えると思うわ……」

「そこが、違うのよ……髪の色白くなった、バックカードでも、クライスラーでもという老紳士が、焼芋をおあがりと言うから、利くのよ、」

マダムは如才なく、

「まあ、奥さま……内緒ばなし……でもお若いこと……だって御主人さまが、うちの孫が、孫がっておっしゃるもんですから——とても、お孫さんがあるようには、みえませんわ、」

かかる遊び場で、わざと、もう年をとったの、孫が何人あるの、というのは月並ながら、当りさわりのない習慣でもあるから……焼芋や、孫の話をしたりするのは、実感とは関係がなくなてかまわないのだ。

いかにも、孫が五人ありそうなくしゃくしゃの顔で、孫が五人ありますというのとは、カテゴリイが違うのである。

「……孫って言えば、どうしたの、あの、あんたの娘のような、可愛い子がいたでしょう、新鮮な……焼芋の好きな……」

北見が、マダムに言った。

「……あの子ですか、やめました、あのひと、かたくてね、いいお客さまをみんなすてて……変ってましたね、」

北見の胸のなかに、きつつなれにし、ふりそでも……そんな文句がうかんだ。かたいと言われる若い女の、ミルクの匂いのする耳朶を、北見は思い出したのだ。――

雨の降る晩であった。そうだった。……

北見は、商用の客を送って、その足で東京駅の東海道線のホームへ上った。階段の隅に若い女がたたずんでいた。見たような顔だがと、何気なく近寄ると、先方も、

「あら……北見さん、」

「どうしたの、待ちあわせかい、こんなところで気の利かない……」

「ちょっと、お見送りに……よそながらの、」

「そんな秘密の……」

「わたくしだけのね……そのあと、ひとりで帰るの淋しいわ、」

「じゃ、お茶もおつきあいしよう……なんなら、お店へ送っててあげるよ……」

そのうちに、急行列車がはいって来た。たたずんでいたひと達は、見送り人たちと挨拶を交わして乗りこんでゆく。